

『浅茅が露』作者考・序章：藤原為家作者説の仮説

辛島，正雄
徳島大学教養部講師

<https://doi.org/10.15017/11982>

出版情報：語文研究. 61, pp.11-20, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『浅茅が露』作者考・序章

——藤原為家作者説の仮設——

辛 島 正 雄

はしがき

今日、私たちの手に取って見ることのできる物語作品は、その一部、あるいは大部分を失ってしまっているものも少なくないが、優に三十を越す。しかし、その中で、作者の特定できるものとなると、きわめて限られたものとなること、周知のとおりである。とくに、現存作品の過半を占める中世擬古物語の作者については、その想定さえ困難な状態であり、その究明の試みも、作品全般の文学史的評価の低調さとも相俟って、はじめから放棄されているかのごとくである。たしかに、手がかりとなる外部徴証がなく、ほとんど見当もつかない中を、地道に内部徴証を探ってゆくほかない（しかも、そこから何かヒントがつかめるといふ保証もない）のだから、それだけでなくとも手薄な研究者の関心がそこに向かわないのも、無理からぬところがある。が、もし多少とも作者像の輪郭を与えてくれそうな事象に気づけば、蛮勇をふるってでも一考してみることは、やはり必要であろう。

本稿において筆者は、中世擬古物語『浅茅が露』の作者について、

一つの思いきった臆説を提出してみたいと思う。

『浅茅が露』の作者について、その輪郭を明らかにしようとした試みとしては、加藤茂『浅茅が露』の作者についての試案（『緑岡詞林』2号 昭50・12）が唯一のまとまった業績としてあるが、その推定の当否について考えるのは後回しとし、まず、筆者がこの物語の作者像を考えるに際してのそもその手がかりとなったデータの提示から始めたい。

次ページに掲げる△物語別作中歌『風葉和歌集』撰入率一覧表▽がそれである。

『風葉和歌集』における物語歌撰入の規準がどのようなものであったかは、一概には言えないようであるが、おおよその予想される入集状況の傾向としては、

(7) 優れた（世評の高い）作品からの入集歌数は多くなる。

(4) 作中歌数の多い作品からの入集歌数は多くなる。

というようなことがある。従来、『風葉和歌集』入集歌数集中第○位

▼物語別作中歌『風葉和歌集』撰入率一覽表

物語名	入集歌数(A)	作中歌数(B)	撰入率(C)
一 源氏物語	一七六	七九五	二二・一
二 うつほ物語	一〇七	九八六	一〇・九
三 狭衣物語	五六	二二六	二五・九
四 風につれなき	(四五)	(二五)	(二〇・〇)
五 いはでしのぶ	三三	三〇四	一〇・九
六 浜松中納言物語	(二九)	(二二五)	(二八・四)
七 夜の寢覚	(七五)	(七五)	(九・三)
八 有明の別	二〇	九〇	二二・二
九 松浦宮物語	一九	七一	二六・八
一〇 浅茅が露	(九)	(二七)	(三三・三)
一一 落窪物語	八	七二	一一・一
一二 住吉物語	七	?	
一三 我身にたどる姫君	七		七・一
一四 今とりかへばや	六	八四	七・一
一五 石清水物語	五	三九	一二・八

一六 竹取物語	三	一五	二〇・〇
一七 苔の衣	二	九九	二・〇
一八 しづくににごる	(二)	(九)	(二・一)
一九 むぐらの宿	(二)	(二〇)	(五・〇)

【注】

- (1) 撰入率(%)は、次の要領で算出した。C=A/B×100
 - (2) 括弧つきの入集歌数は、現存本に所載のもの数である。
 - (3) 括弧つきの作中歌数は、現存本が残闕本につき、そこに見える限りの数である。
 - (4) 『うつほ物語』の入集歌中、現存本に見えない三首は除いた。
 - (5) 『うつほ物語』の作中歌数は、便宜上「角川文庫」本の数に従った。
 - (6) 『源氏物語』の入集歌中、古本『すもり』にあったと思われる四首は除いた。
 - (7) 『狭衣物語』の作中歌数は、便宜上「日本古典文学大系」本の数に従った。
 - (8) 『我身にたどる姫君』の作中歌数は、巻四までのものである。
 - (9) 同様の表が玉上琢彌「昔物語の構成」(同氏著「源氏物語研究」(角川、角川書店)所収)に示されているが、いま別個に作成した。
- というような言われかたが少なくなかったのであるが、入集歌数の多寡は、必ずしもその作品の評価に正比例しているとは限るまい。そこで、『風葉和歌集』を手がかりに作品評価を窺うとすれば、全作中歌からどのくらいの比率で撰入されたかを見ることが、便宜である。△表▽は、そのための、物語別の撰入率一覽である。

*

『源氏物語』と『狭衣物語』とは、もとより別格ということになるのだから、それぞれ22・1%、25・9%と、四〇五首に一首の割合で入集しており、これを高撰入率の目安としておけばよからう。

『うつほ物語』は、入集歌数は集中第二位であるが、作中歌の多さがその因由であり、撰入率は『源氏物語』の半分である。『無名草子』で古めかしさを批判され、鎌倉期の享受の実態も低調なものであったことを思えば、納得のゆく数字といふべきなのであろう。

この『うつほ物語』の撰入率を頭において見ると、従来集中第六位の入集歌数ということで注目されている『いはでしのぶ』が、意外に低い撰入率を示しているように思われる。『いはでしのぶ』は中世擬古物語中屈指の秀作と目され、後までかなり読まれていた形跡もある。おそらく発表当時から評判をとっていたのではあるまいか。それが、三〇四首という、『狭衣物語』を大きく上回る作中歌を有しながら、撰入率は一割あまりで、歌数にして『狭衣物語』より二三首も少ないのは、何か理由がありそうに思われる。例えば、この物語が最近作であるために、古典的な作品の場合よりは多少遠慮がはたらいたものかもしれない。あるいはまた、文章力の非凡に比して、歌は必ずしも卓越したものとはいえないというような事情もあるのであらうか。

『いはでしのぶ』の上位にくる『風につれなき』も最近作であるが、首部を残し大半を逸失しているため、四五首という集中第四位の入集歌数が撰入率でいえばどうなるのかは、まったく明らかでない。

『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』の撰入率も、現存本が完本でないため正確ではないが、欠巻の分量からすると、『浜松中納言物語』の方には大きな誤差はないであらう。撰入率18・4%は『源氏物語』『狭衣物語』よりは低いが、まずは順当な数字であらう。『夜の寝覚』の場合は、欠巻の分量の見積りかたいかんで、かなりゆれが出て来そうである。現存部分で見える限りは、撰入率9・3%という、『うつほ物語』以下の低率であり、『無名草子』でのあの傾倒ぶりや、『物語後百番歌合』では右方の第一位に据えられていたことからすると、かなり厳しい数字といわざるをえない。ただし、当時は、現存部分(とりわけいわゆる第三部)に対する評価が必ずしも芳しいものではなかったこと(第一部は三二首中五首入集し、撰入率15・6%、第三部は四三首中二首入集し、撰入率4・7%である)からすれば、低率はそのゆえであって、全体としてはもっと高率になるのかもしれない。例えば、かりに完本の分量が現存本の二倍であったとして、歌数も二倍になるとすれば、撰入率は16・7%と、ほぼ『浜松中納言物語』と近い数字になる。

『有明の別』は、意外な高撰入率である。その粉本ともなった『今とりかへばや』に、入集歌数・撰入率いずれにおいても、約三倍の差をつけている。当時、秀作の誉れでもあったものか、不明である。ただ、中村忠行氏や大槻脩氏の推定によって、作者は定家的な文学的雰囲気の中に身を置く人であるらしく、場合によっては御子左家の誰かである可能性もあり、だとすると、この高撰入率は、いわば身内鼻肩によるものであるかもしれない(『風葉和歌集』の撰集作業の実態については後にふれる)。

『松浦宮物語』も高撰入率を示す。しかもこれは、別格にしてい

た『源氏物語』『狭衣物語』のそれをも凌ぐのである。おそらくここには、小木喬氏も言われるごとく、作者である歌聖定家を尊重しての特別待遇という背景があるのであろう。

*

さて、次に来る『浅茅が露』が問題である。この物語は末尾を失っているが、現存部分での撰入率が33・3%、三首に一首入集と、驚嘆すべき数字があらわれている。ただし、末尾の散闕部分の分量しだいとその数値も変わってくるはずだが、現存本の後にさらに長々と倍くらいも続くとは考えにくい。現存本は五綴よりなる綴葉装の写本(墨付八八丁)であるが、これにもう一綴加わるとすれば、一綴一〇折として、単純計算ではもうあと六首ほど歌がふえることになり、撰入率は30・3%となる。二綴加わるとすれば、一二首歌がふえ、撰入率は25・6%である。いずれにせよ、高撰入率であることは動かない。では、『浅茅が露』のかかる高い撰入率は何に基因するのであろうか。

『浅茅が露』の成立時期は、大槻氏によれば、一二五〇年を降るといふ。『風葉和歌集』の成立が、周知のように文永八年(一二二七)であるから、それこそ『浅茅が露』は最近作である。最近作からの入集状況は、『いはでしのぶ』について見たことからすれば、古典的な作品の場合よりは遠慮する傾向にあるように思われる。ほかに、『我身にたどる姫君』『石清水物語』『吾の衣』等も最近作であろうと思われるが、その撰入率は一様に芳しいものではない。とすれば、そのような中で、『浅茅が露』の突出ぶりは、ますますもって異様だとせねばならない。

では、『浅茅が露』が稀有の秀作であると認められて、最近作であ

るにもかかわらず、かかる処遇をえたのかといえは、それもどうも疑わしい。実際、この作品に相對してみて、そこに他の諸作を凌ぐ高い文藝的香気を嗅ぎつけることなど、至難のわざなのである。にもかかわらず、この高撰入率——。そこには何か特別の事情が介在しているように、筆者には思われてならないのである。

ここで、一つの可能性として泛んでくるのは、『浅茅が露』に、『風葉和歌集』撰集に際して尊重されねばならぬ理由があったのではないかと、ということである。

『風葉和歌集』撰集が大宮院皇子のもとで企画された後、いかなるプロセスでその作業が進められ、最終的な完成を見たかについては、樋口芳麻呂氏の詳細を極めた研究があるが、その要点のみでいえば、大宮院の女房たちを動員して、物語歌の選択、詠歌事情を説明した詞書の作成等の下準備が整えられ、その部類・配列を中心とした撰修作業が、最終的に時の歌壇の大御所藤原為家の手に委ねられた、ということに尽きる。したがって、最近作『浅茅が露』がそのような状況の中で重んぜられるとすれば、その条件はおのずと絞られてくる。まず、撰集の下命者大宮院自身の作だから重視された、と仮定すれば、撰入率の高さは納得できるものの、大宮院が物語執筆を手がけるとは、とうてい考えがたいことであろう。また、準備にあたった女房たちの中には、物語作者であった者が十分に存在しうるのであろうが、そのような女房の作ならば、その特別待遇にもおのずと限界があろう。となると、俄然注目されるのは、為家の存在である。

今日、物語作者としての為家の姿を伝える資料は、まったく知られていない。しかし、その父定家が現に『松浦宮物語』の作者であ

り、俊成以来御子左家と物語との繋がりがきわめて密接であったことを思えば、為家の物語執筆の可能性も、一概に否定しきすることはできないと思う。思うに、『風葉和歌集』の最終撰者としての任が為家に委嘱されることが決まった時、もしその為家の手になる物語作品があったとすれば、その出来の良し悪しは度外視して、そこから多数入集すべく、準備された資料中に盛り込まれていた(樋口氏によれば、準備にあたった女房たちの中心となったのは、為家の孫である大宮院権中納言¹¹從二位為子であつたろうという)としても、むしろ当然であろう。そのような資料を受け取つた本人としても、悪い気がしたはずはないのである。

以上、『浅茅が露』という、とりたてて佳品とも思えぬ比較的短い一篇が、異様に高い撰入率を示しているという事実から、その作者像をめぐって、筆者は右のような想像をめぐらす。

2

ところが、これには真つ向から対立する見解があるのである。前記加藤論文では、『浅茅が露』の作者の性別につき、次のように述べている。

(上略)「浅茅が露」の基調はやはり「旧い様式の文学」にある。「浅茅が露」の全体を鳥瞰すると察せられるように、この物語はあくまでも尚侍の変転する生涯を、二位中将、三位中将を点綴させながら辿っていつている。¹²女性が中心人物である時、それを描くのがやはり女性だろうとは必ずしも言切れないが、先行物語の充分な受容と、消化・再生は、少くとも「作り物語」に関しては、男性よりもむしろ女性作家を想定し易いのではあ

るまいか。

この推定が妥当であるとする、右の為家作者説などお笑い草になるのだが、しかしながら、加藤氏の綿密・慎重な推考にもかかわらず、筆者には、女性作者を想像することがむずかしい。その点では、根拠を示されなかったものの、つとに木村三四吾氏が、

作者については知らない。内容から推して或は男の手になるかと思はれるがあくまでも想像の言に過ぎぬ。¹³

と言われた男性作者をイメージしていたこと、いうまでもない。

さて、筆者の判断では、加藤氏が作者の性別を考えるに際しての論拠とされた部分は、必ずしも女性作者たるべきを積極的にものがたるものとは認められず、見かたしだいでどちらにも転びうるように思われる。よって、ことさらに反論の要もないと思うので、別に一二の観点から、男性作者を想定したいと考える理由を述べることにする。

*

まず、作品全体を通覧してただちに印象づけられることだが、『浅茅が露』の作品世界に、女性の手になるとするには抵抗のある、妙に卑俗で品下った点の露わであることが指摘される。その最たるものは、大槻氏の校注本¹⁴でいえば第十節から第十一節の、物語の本筋とはおよそ関係のない、滑稽な挿話の存在である。この挿話について大槻氏は、

王朝物語の系列作品にしては珍らしく諧謔とユーモアに富んだ、いわば滑稽風流譚的一幕である。¹⁵

と評されているが、ユーモアというには多分に露悪的でどぎつい感があり、醜女を容赦なく笑いのめしているところには、同性の作者

であれば見せそうな一点の同情や暖い眼差といったものが、微塵もない。微頭徹尾笑いものにするために書かれているのである。そういう意味で、このような文字は、前期物語の世界にかえて近く、『源氏物語』以降の女流の筆になる作品からは窺うことのむずかしいものである。むしろ、新興の説話集や藤原明衡らの漢文戯作の哄笑の世界に通ずるともいえる。

中納言（二位中将）がはじめて故中務宮邸をのぞき見た時の、次のごとき内の様子はいかかであろうか。

あやしげなる中に、「かれや、さは主ならん」と見給へば、「廿四五もやあらん」と見ゆる、色いと黒う、耳はさみして、髪うち結いたる元結より下は、屏風などの心地して、うるはしからず見ゆる。「このつどいたるなかに、まさるけちめもや」と見たまへど、なし。大人だちたるもの、「それはしもよく思しめしなり。このとくごうのことなどぞ、耳よりにはおぼゆる」といふなれば、「げにたわらもとのかきなどもすてがたし」とて、秀句げにうち笑ひたる方は、「にくからずと見る人もやあらん」とおぼえ給ふ。⁽⁵²⁾

女たちの会話がすこぶる難解であるが、「げにたわらもとのかき」云々は、何か気の利いた洒落でも言ったつもりなのであろう。大槻氏が「しうくげ」に注して、

不詳。非常にみにくげに笑ったの意で「醜苦げ」か。或いは「愁苦」「重苦」「洪苦」か。⁽¹⁶⁾

とされるのは不審である。醜くげに笑ったのでは、下の「にくからずと見る人もやあらん」と完全に抵触する。

その場に適った秀句を言えることが、社交の才能の一つとしてし

ばしば文学作品上に見出だされることは周知のところだが、かかる機知を好むのが女性よりは男性であること、自明であろう。もちろん、個人の資質や置かれた環境に左右されることではあるが、その本質は、早く『蜻蛉日記』中での兼家と道綱母との関係に典型的に窺いうるであろう。そして、そのような男性の文学的営為としては、一卷まるごと「興言利口」の部に充てた『古今著聞集』のごとき作品すら生むのである。

中納言が二度目ののぞき見をした部分も、卑俗な描写に徹して、秀抜である。

中垣より入りて、さりぬべきかたをかいばみ給へば、人待つ気色ことのほかに、うちさゝめき、ふくらかにうち肥えたる人の、いとさま下りたるさましたるが、眉太くつくり、鉄鬚黒く、笑みがちに、あそこに燈台、かしこに屏風など置きてありくを、「なに事ならん」と思すほどに、あるじ顔なる御座の奥に、これも、いますこししなやかに、髪のかゝりなどもゆへあるさまに見へたるが、甘余ばかりなる、かたわらについで居て、「この髪見給へ。さばかり髪しつれども、髪のかゝりなま直らず」とて、後をまかせ、つくろはすれば、「夜なれば、なにか苦しからん。いまをはしめる事もあらんに、静かに待ちたてまつり給へ」と言ふ気色、「妹にや」と見ゆれど、ことのほかに静まりておぼゆ。⁽⁵⁵⁾

ここについては、大槻氏に、このあたり、提中納言物語の「虫めづる姫君」「はい墨」を想起させる。（中略）醜女の容貌、動作を写して、なかなか巧みである。⁽¹⁷⁾

との確な指摘があるが、引き合いに出された『虫めづる姫君』『はい墨』いずれも、男性作者説が有力視されていること、周知のとおりである。

また、品下ったというには語弊もあるが、高貴な姫君やヒロインに、それに似つかわしからぬ男が挑むという設定が繰り返されているのも、特異である。その一は、二位中将の訪れの稀なことに気を病んだ先坊の姫宮が、その加持のために滞在していた叔父(故母御息所の兄弟)の律師に凌辱されるというもの。その二は、ヒロインが、その乳母の死後、乳母の夫(ヒロインからすれば父親代わりの存在であった)に邪心をもって挑まれるというものである。物語の予想される読者が女性であることを思うとき、かかる設定は、いずれもかなり露骨であり、ここまでふたりの女性を屈辱的なしうちにあわせる必要があったものか、やや疑問を禁じえない。ことに、僧に犯される女性像をかなり執拗に描いている(しかもかの女は、僧との交際の現場を恋人に目撃されてしまい、かれからの「見たぞ」という痛烈な和歌を突きつけられた挙句、悶死してしまうのだ)のは、同性として正視にたえるものであるかどうか。かかる設定は、『狭衣物語』における仁和寺の僧による飛鳥井女君拉致の話などと比べられることもあるが、とうてい同日に論じられる底のものではないのである。むしろ、『とはずがたり』での二条と有明の月との放逸無慙な愛欲もようこそ、これに匹敵しうるものである。このような人間関係を見る目の酷薄さの中からは、開卷劈頭を称徳女帝と道鏡の秘話で飾って憚らない(『古事談』)説話の撰者たちとも共通するものが感じられないであろうか。よし「女性のひそかな凌辱への願望」がそのような設定を生み出させる源泉として想定しうると

しても、かかるシチュエーションを好んで取り上げるのは、やはり男性作者であろうと思うのである。

さらにいえば、『浅茅が露』には、多くの物語が芬々として漂わせている雲上絵巻としての香りが、ことのほか薄いのである。場末に住んでいたヒロインに二位中将がめぐり逢うのは、『源氏物語』の「夕顔」巻あたり以来の類型ではあるが、次のような場面での奇妙になまなましい生活臭は、「夕顔」巻の比ではない。

ある人、「いとねぶたくこそなりにたれ。目さまし侍らん」とて、火桶のかたはらに寄りて、折櫃などをとり寄せて、火の上へに置きなどする物あるべし。「中将殿、近くてをはしますらんに、くさくもこそ」と言ふれば、「はや御殿籠りぬらん。これをしもかゞせ給はじ」など言ひて、硯の蓋に、なにゝか、とり入れて、「これは姫君の御前に」と心ざすかたのあるを見やり給へば、云々 (25オ、25ウ)

また、ヒロインの死後、その所生児の養育に窮した女房たちが、「乳母かはん(62ウ)と言いながら都大路をさすらうくだりも、すでに大槻氏が注意されていることく、『今昔物語集』巻十九第四十三話などを彷彿させる、物語文学としては異色の、なおかつわめてリアルな設定になっている。このような作風は、物語の多くを作り出したと思われる宮廷女房たちの中から出て来にくいものである。概して女流の筆は、ものごとを美化・理想化して捉える傾向にあると思われるが、その点からしても、不思議な日常的で野鄙な手ざわりをもったこの『浅茅が露』という物語は、男性の手になったもののように感ぜられるのである。

*

さて、いま一つ指摘しておきたい事実は、『浅茅が露』に、女性作者の手になるとするとまずは行われていそうな、物語通有の、今日の読者には煩わしいほどの衣裳描写が、まったくといってよいほどなされていないということである。もっとも、『源氏物語』にその粹を見る華麗な衣裳描写であるが、物語史の上では、その場面の喪失と歩調を合わせるようにして、徐々にその表現方法が形骸化してゆくことが知られており、そのような観点からすれば、かかる現象もとくに目立たしいことも言えぬかもしれぬ。しかし、少し目を転じて、鎌倉時代頃の女性たちの関心のありようを考えてみるならば、『たまきはる(健御前日記)』『弁内侍日記』とはすがたり』『中務内侍日記』といった女流日記文学での一様な服飾への思い入れようひとつをとってみても、女性の手になる物語の世界から衣裳描写がにわかになくなっていくことは、そうはありえないことのように思われる。現に、『浅茅が露』とさほど隔らぬ時期の成立と目される『いはでしのぶ』や『風につれなき』などでは、きめ細やかな衣裳描写が、けっして失われていないのである。ただし、かといって、男性の文章に衣裳描写がないかといえは、そうでもない。例えば、つとに『うつほ物語』の場合などが想起されるところである。しかし、それも、下って定家の『松浦宮物語』を見る限りは、有効な衣裳描写はほとんど影をひそめているといわざるをえないのである。やはりそこには、男性作者の興味の向かいがたが、色濃く反映しているのではあるまいか。

ところで、『浅茅が露』には、衣裳描写があってもよきそうな場面がもともと皆無であるのかといえば、そうではない。冒頭、宮中で管絃の遊びの場面があるが、そこは、帝の召しを受けて、中心人

物たる二位・三位ふたりの中将が登場、春宮も一緒に演奏が行われる、物語最初の絵画的場面であるにもかかわらず、人々の服飾についての言及はない。また、二位中将がはじめてヒロインを垣間見、二夜逢瀬をもつ一連の重要なくだりにも、衣裳描写は行われない。先にふれた滑稽な挿話中の二度ののぞき見の場面も同様(なお、第五節と第十節の二つののぞき見の場面において、ともに女房たちが裁縫をしているというのは、下級貴族の日常生活の一面面を見せているのであろうが、作者の目のつけどころを示唆するものとして、注意される)。かろうじてそれらしいものとしては、次のような例を挙げうるにすぎない。

●上(左大臣ノ姫君。二位中将ノ北ノ方)は、このころの梅の立枝、心もとなき蓄の色、五重重なりたる着給ひて、かたはらに臥し給へるありさま、たをやかに、春の柳の風にうちなびきたるを見る心地するに、二云々 (32ウ〜33オ)

●三位の中将をはしたり。待ち喜び給ひて、御直衣たてまつらんとし給へば、(中略)とて、御指貫もとり給ひて、近く寄り給へば、御直衣気色はかりにて、二云々 (65オ)

●透垣のはさまよりとをされたる仏の御前に、いとおぼえなく、うつくしき女房、白き搔練をはかなげにひきかけて、経にむかひたれば、二云々 (78ウ)

なお、参考までに、『石清水物語』巻一において、秋の中将が宇治からの帰途、木幡の地とある邸を垣間見する条を掲げておく。

格子二間ばかり上げたるに、小さき童のをかしげなる、山吹の相に二藍の汗衫着て、(中略)とて、笑みたる気色、田舎びたるさまならず、いとめやすし。(中略)とこそのかせば、「あらは

にもや」とて、みざり出でたる人を見れば、二十に二三やたらざらんと見えたるが、桜の細長に葡萄染えびぞらの小袷せうあし着て、様体・頭かぶつきよりはじめて、目もかかやくばかり、「あなめでたの人や」と見えて、らうたくうつくしき事、限りなし。咲き乱れたる花のにはひもけ劣りて、あさましきまでもまられたまふに、まづ御胸はふたがりて、「世にはかかる人もあることにこそありけれ。こころ見し人、かたはし及ぶべきこそなかりけれ。なばかりの人ならん」と、つくづくとまもりたまふに、二云々

ちなみに、『浅茅が露』と成立時期が近接していると目される物語の中で、常磐井和子氏によって「男子の手になつたもの」と推定されている『むぐらの宿』もまた、衣裳描写の少なさの目に立つ作品であり、秋香台文庫蔵本43ウに十四五才の女童が白い相を着ているとするのが、唯一の具体的な記述といったありさまである。

してみると、『浅茅が露』の作者には、場面描写にあたって、登場する人物の着ているものまで注意をはらっておこうなどということとは、ほとんど念頭になつたものと判断せざるをえない。もっとも、見かたによっては、物語が上つ品の女性をめぐってはほとんど展開しないということから、さまで服飾描写の要がなかったと見られなくもない。が、それにしても、この際立った無関心さは、否定のしようがないのではあるまいか。そして、ここからは、やはり男性作者の手になるゆえと考えるのが、最も納得のゆくところであろうと思うのである。

むすび

以上から、筆者は、『浅茅が露』の作者としては男性を予想したく、それに特定の人物を擬するとすれば、今のところ、『風葉和歌集』の最終撰者である藤原為家を措いてほかにいないのではないかと推測する。

かくて、次の段取りとしては、『浅茅が露』に為家作であることを傍証するような内部徴証（和歌や引歌など）が見いださるか、あるいは、為家の閨歴と作品内容との相関性は、といった問題を検討してみねばならないが、それらについては、紙幅の都合もあり、すべては続稿に委ねたいと思う。

おそらく本稿は、『風葉和歌集』撰入率なるものに、重大な意味のあることを期待しすぎているようにも見えよう。たしかに、約二〇〇種の所載物語のうちの一割ほどのデータに、何ほどの傾向性が指摘しうるものか、不安がないわけではない。しかし、そこにあらわれた数値が、思いのほか納得のできるものを示していることは、そこで述べたとおりなのである。

もし、この『浅茅が露』は為家作か√という臆説が今後の検討に値いするものであるならば、中世の時代や社会とはほとんど切り結ばれることなく、尚古趣味の幻想の中から生まれきたかのごとく見られていた擬古物語の研究に、和歌研究と提携して新たな照明を当てて何がしかの端緒も開けてこようかと思う。現時点ではほとんど無謀に近いかかる試みをあえて行ったゆえんも、そこに存す

(一九八六年一月稿)

注

- (1) 樋口芳麻呂『風葉和歌集』の入選歌——『竹取物語』『落窪物語』を中に——(『鈴木弘道教授退任記念国文学論集』) 昭60、奈良大学文学部国文学研究室(所収)、同『住吉物語』と『風葉和歌集』(『国語国文学報』42集 昭60・3) 等参照。
- (2) 中野幸著『うつは物語の研究』(昭59 武蔵野書院 第七章・二)うつつは物語の影響」参照。
- (3) 小木喬著『いはでしのお物語 本文と研究』(昭52、笠間書院) 研究篇・二「本物語の伝流」および、拙稿「中世物語史私注——『いはでしのお』恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』をめぐって——」(徳島大学教養部紀要(人文・社会科学) 21巻 昭61・3) 参照。
- (4) 注(3) 小木著書研究篇・五「成立年時と作者」によれば、二四〇〜二五〇年の成立であるという。
- (5) 樋口芳麻呂著『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(昭57、ひたく書房) 第二章・第二節「風につれなき」物語」参照。
- (6) 中村忠行『有明の別』雑致——成立をめぐって——(『山辺道』4号 昭33・3)。
- (7) 大槻脩著『在明の別の研究』(昭44、桜楓社) 研究編「作者(引歌にみられる定家的解釈について)」。
- (8) 小木喬著『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』(昭48、笠間書院) 第一章・第一節「物語史概説」14へ。
- (9) 大槻脩著『あさちが露の研究』(昭49、桜楓社) 研究編『あさちが露』と『浅茅原の尚侍』(その一)」参照。
- (10) 注(5) 樋口著書第三章・第四節『風葉和歌集』参照。
- (11) このような『浅茅が露』の主題性について、筆者は従来(の諸家の説と多少異なった捉えかたをしているが、そのことによってもイメージされる作者像は違っていない。拙稿『浅茅が露』管見——主題性と物語史的的位置——(『国語と国文学』63巻4号 昭61・4) 参照。
- (12) 木村三四吾校『あさちが露』(古典文庫七五冊) (昭28、古典文庫) 書

誌1へ。

- (13) 大槻脩著『あさちが露』(昭50、桜楓社)。本書は、注(9) 著書の本文編を補訂したテキスト版である。
- (14) 大槻脩『物語歌と物語歌集——『風葉和歌集』からみた物語』あさちが露』——(『日本のことばと文芸』3集 昭56・12)。
- (15) 『浅茅が露』の引用本文は、『あさちが露』在明の別(天理図書館善本叢書6) (昭47、八木書店) の影印によって翻字したものに、私に校訂を加えた。所出丁数・表裏を示す。
- (16) 注(13) 大槻著書『あさちが露』(昭50)。
- (17) 注(13) 大槻著書『あさちが露』(昭50)。
- (18) このように解すべきであることについては、石椋敬子『あさちが露』私註(一)——(『跡見学園短期大学紀要』14集 昭53・3) 参照。
- (19) 三谷栄一・今井源衛編『堤中納言物語・とりかへばや物語』(鑑賞日本古典文学12) (昭53再版、角川書店) 本文鑑賞32へ。
- (20) 注(13) 大槻著書『あさちが露』(昭50) 補注参照。
- (21) 桑原博史著『中世物語の基礎的研究』(昭44、風間書房) 本文篇第28へ。私に適宜校訂を加えた。
- (22) 常磐井和子編『二巻本むぐら 秋香台文庫蔵』(昭59、笠間書院) 解説8へ。